

# 徳永直の会会報

第70号

## 徳永直没後六〇年記念事業

会長 高木陽助

一九五八年（昭和三十三年）二月十五日、徳永直は東京世田谷の自宅で死去した。まだ働き盛りの五十九歳であった。

没後二十一年目に熊本・徳永直の会が結成され、徳永直文学碑が立田山麓に建立された。と同時に文庫本で『徳永直短編選集』が発刊された。その後、毎年「孟宗忌」が実施され、「会報」が出し続けられている。今年この会報が七十号となる。

一九八七年の没後三十年には近代文学館で「徳永直展」が開催された。徳永直の娘婿津田孝氏（文芸評論家）を招いて講演会も実施された。一九九七年には第二〇回孟宗忌と直の次女津田道代氏を招いての記念行事が開催された。一九九九年には「徳永直生誕一〇〇年」を記念して墓前祭・講演会・映画会・偲ぶ会などが行われ、「会報」の特集号も発刊された。二〇〇二年から毎月一回の「徳永直作品読書会」が基礎となっており、二〇〇八年、没後五十年に『徳永直文学選集』一・二（翌年）が発刊された。また、没後五十年では大勢の聴衆の前で針生一郎氏の講演やパネルディスカッションが行われた。さて来年は没後六十年になる。地元熊本県民でさえ徳永直の作品を読む者は激減している。若い人に文学者徳永直のことを聞いても知っている人はほんのわずかである。この現状に何とか風穴を開けたい。

### 目次

- ・「徳永直没後六〇年記念事業」 高木陽助：p1
- ・「海と毒菓」の舞台を訪ねて 鉦田吉豊：p1
- ・「徳永直作品朗読会」報告 岡本孝美：p2
- ・文学散歩⑬『こんにやく売り』 緒方宏章：p3
- ・第四十回「孟宗忌」より 高木陽助：p4
- ・「徳永直没後六〇年記念事業」案内 高木陽助：p5

二〇一四年八月八日、朝日新聞のオピニオン欄に直木賞作家中島京子氏の『戦前』という時代」という文章が載った。その中で中島氏は徳永直が戦後に書いた随筆「追憶」を素材にしている。

「目を向けよう 私たちは変えられる」とある。ぜひ講演会講師として熊本に来ていただきたい。超多忙の中島氏にお願いすると快諾された。

没後六十年、徳永直にもいい土産ができる。

## 「海と毒菓」の舞台を訪ねて

鉦田吉豊

仲間と読書会をやっている、遠藤周作の「沈黙」と「海と毒菓」を読んだ。それからひと月もたないうちに、博多まで出かける機会があった。そこで今回は、ついでに「海と毒菓」の舞台となった旧帝国大学医学部・附属病院の界限まで足を伸ばしてみることにした。

この辺りに足を踏み入れるのは、実は初めてのことでない。転勤族だった父の勤務の関係で、幼稚園の頃から十年間、医学部敷地

のすぐ近くに住んでいた。当時の医学部構内は、刑務所にも見まがうような、三メートル近い見上げる高さのコンクリートの塀に全域がすっぽりととり囲まれていた。今回、およそ半世紀ぶりに訪れて戸惑ったのは、記憶に刻み込まれていた長大な塀が跡形もなく消え失せ、目の高さほどの今風な金属柵に変わってしまったことだった。

当時、高度成長期に入る前後、博多の東端にあたるこの辺り一帯は、見渡す限り平屋かせいせい二階建ての瓦屋根の民家が立ち並んでいた。それに対し、高いコンクリート塀に囲まれた医学構内は、現在のような高層建築ではないにしても、その中だけ近代的なビル群がそびえ立っていて、一種、要塞都市のような雰囲気をも出ししていた。あの陰惨な事件はそこで起きたのだ。

両親が宿舎に居を構えた頃、小説の素材となった事件から十年ばかり隔たつてはいたが、他県から移り住んできた父や母は、目の前のコンクリート塀のすぐ向こう側で、米兵人体実験が行われたという事実を知っていたのだろうか。地元の小学校に通った私は、それに類する話についてまったく聞いた覚えはない。

作品の中では、いつも生命の尊厳と向き合っているはずの医療従事者たちが、ある者は無感動に、ある者は虚無的に、またある者は学部内の権力闘争の流れの中で、ほとんど立ち止まることもなく、いともたやすく軍部の要請に応じてしまう。これら登場人物たちすべてを押し包んでいる時代の空気、ひたすら破局へと突き進んでいく敗戦間際の状況を、作者はくり返し、黒くうねりながら押し寄せ、また黒くうねりながら退いていく波、人々を引きずり込み押し流す暗い海、という表現で象徴的に描いている。博多湾の向こうは荒波で知られる玄界灘だが、日本海の西の端に当たり、事実、北九州や博多は同じ九州といっても日本海性気候に分類されている。

抗う術もなく人々を押し流す大きな歴史のうねり。考えてみれば、徳永直もまた、大正デモクラシーの昂揚期から暗

転して十五年戦争へと突き進んでゆく時代の狂気を、生活者の目線からずっと見据え続けてきた、と言えるだろう。俯瞰的に見て、今、私たちがどのような局面に立っているのだろうか。

(同人誌「べれそっそ」代表)

## 徳永直作品朗読会報告

ニワカフェ 岡本孝美

【開催日】平成二九年六月二日(水) 13:30~15:00

【開催場所】「ニワカフェ」(熊本市中央区黒髪)

【開催目的】ニワカフェ近所に徳永直の旧居跡があるが、近所の人々が徳永直のことを知らないので、徳永直や徳永直の作品を知るため。また、地域の人々のコミュニティの場所「ニワカフェ」紹介し、

来てくださった人々の意見を聞き、「ニワカフェ」のあり方、ニーズを把握するため。

### 【朗読会】

①ハーモニカ演奏 「この道」  
安田京子さま

②徳永直作品朗読  
『「こんにやく売り」』

矢部 絹子(朗読家)  
野田亜紅

③ハーモニカ演奏「叱られて」  
(アナウンサー)  
安田京子さま



④ 徳永直作品朗読  
『北島善作さん』

勝俊彦  
(朗読家)

⑤ 作品解説

高木陽助  
(徳永直の会)

【参加者の感想】

・初めて朗読会に参加しました。最初は慣れなくて情景を想像できませんでした  
が、だんだんと情景が浮かぶようになりました。貴重な体験ができて良かったです。  
・朗読者の声が絶品でした。  
・こんにやく売りの話が印象的でした。



朗読 勝俊彦さま

・出演者が本物の方ばかりだったので、初めてでも疑いも抵抗もなく参加できました。  
・ハーモニカの時もですが、目を閉じて朗読を聞くとすごく情景が広がりました。  
・自分は大阪の出身ですが、同じころ同じような貧しい農村で育ちました。やっぱり善作さんみたいな変わり者がいましたし、納豆売りをしている友人もいました。



朗読 矢部絹子・野田亜紅さま

文学散歩 ⑬

『こんにやく売り』

二

あるとき林の家へいつて遊んでいると、林が大きな写真帳をもってきて、私にみせたことがある。それはハワイの写真で、汽船が沢山ならんでいる海の景色や、白い洋服を着てヘルメット帽をかぶった紳士やがあった。その紳士は林のお父さんで、紳士のたっているうしろの西洋建物の、英語の看板のかかった商店が、林の生れたハワイの家だということであった。  
「ぼくが」生れないはずとまえ、お父さんもお母さんも、労働者だったんだよ」



立田山より黒髪小学校方面を望む

林はそう言って、また写真帳の他のところをめぐってみせた。そこには、洋服は洋服だが、椰子の木の生えたひろい畑の隅に、跣足で柄の長い鋏をもった林のお父さんと、傍に籠をもつてしゃがんでいるお母さんとがならんでいた。  
「とても働いたんだネ、働いて金持ちになつて、今のお店を

緒方 宏章

作ったんだ」

「フーム」

「いまお父さんは市の収入役をしてるよ、アメリカ人でも、フランス人でもお父さんのところへ相談にくるんだよ」

「フーム」

私は写真帳を見ながら、すっかり感心してしまった。そして林が何故、私のこんにやく売りを軽蔑しないか、それがわかった気がした。

働いてえらい人間にならねばならない。日本ばかりでなく、外国へいってもえらい人間にならねばならないと思っただ。

それからはこんにやく桶をかついでいても、以前のようにひどく恥ずかしい気がしなくなった。――

小学校を卒業してから、林は町の中学校へあがり、私は工場の小僧になったから、いぜんと別れてしまったが、林のなつかしい、あの私が茄子を折って叱られているとき――小母さん、すみませんーと詫びてくれた、温かい心が四十二歳になってもまだ忘れられない。

その後、私はねっしんに勉強して小説家になった。林茂君もたっしやでいれば、どつかできつとえらい人間になっていくくれるだろう。いま一度逢って、あのお礼を言いたいものだ。

（徳永直選集「より」）

小学校五年生ごろからこんにやく売りを始めた作者。大きな屋敷が沢山ある住宅地に売りに出かけた。「こんにやくはア、こんにやくはア」と大声で売り歩く少年。そんな少年にとって「たった一つだけが、いつまで経っても、恥ずかしく辛かった」こと、それは「同級生にぶつつかること」であった。「もうすぐ夏になる頃の、天気の良い日曜日」に事件は起こった。

少年のために詫びてくれた小林君。この時から彼を好きになり、家へも遊びに行くようになった。良い思い出であった。

## 第四十回孟宗忌報告

期日 平成二十九年二月十二日（日）午後一時三十分から

場所 「徳永直文学碑」前

式次第

- ① 会長挨拶
- ② 献酒
- ③ 献花
- ④ メッセージ（金野文彦氏）
- ⑤ 経過報告
- ⑥ 作品朗読会
- ⑦ 総会



碑前祭参加者



朗読会 『白い道』



メッセージ 金野文彦氏

## 「徳永直没後六〇年記念事業」案内

### 【趣旨】

徳永直は、徳富蘆花に次ぐ熊本が生んだ世界的に著名な文学者です。出世作『太陽のない街』は日本文学史に大きな位置を占めるだけでなく、ドイツ・フランス・ロシアなど世界各国で翻訳され読み継がれています。また、表現規制の厳しかった昭和十年代を代表する『最初の記憶』・『他人の中』などは労働文学の完成作として高く評価されました。『妻よねむれ』にはじまる第二次 世界大戦後の諸作品の多くも第一級の作品と言えます。

労働の尊さと人類愛を追い求めた徳永直の文学は、閉塞感や分断意識が徐々に広がりつつある現代の日本人及び世界の人々に歓迎されるでしょう。

その徳永直が亡くなって、来年で六十年になります。「徳永直の会」は、直木賞作家の中島京子氏とともに、改めて「徳永直の文学」の現代的な意義を考え、再評価する機会にしたいと思えます。

### 【具体的な事業予定】

- (1) 第四十一回 孟宗忌
- ・ 期日 二〇一八年二月十二日(月) 午後二時より
  - ・ 場所 徳永直文学碑前(秦勝寺入り口)
  - ・ ① 碑前祭(献酒、献花、メッセージ、経過報告)
  - ・ ② 徳永直作品朗読会(ガーデンパーティー 上通り草場町)
  - ・ ③ 総会
  - ・ ④ 偲ぶ会 同右
- (2) 「徳永直没後六十年記念講演会」
- ・ 期日 二〇一八年五月二十六日(土) 十二時半受付
  - ・ 会場 くまもと県民交流館パレア(九階第一会議室)

・ 内容 ① 『他人の中』リーディング

② 講演会 講師 直木賞作家 中島 京子氏  
演題 「徳永文学の今日的な意義」(仮題)

③ 「パネルディスカッション」

「徳永文学をめぐって」(仮題)

パネラー 中村青史、浦田義和、和田 崇

(3) 「徳永直を偲ぶ会」(懇親会) 会場未定

(後援団体)

・ 熊本県、熊本市、熊本県教育委員会、熊本市教育委員会、熊本県高等学校国語教育研究会、熊本県教職員組合、熊本県高等学校教職員組合、社会主義協会熊本支部、くまもと市民センター、自治労働熊本本部、熊本歴史学研究会、治安維持法犠牲者国賠同盟熊本県本部、日本民主主義文学会熊本支部、くまもと文化振興会、熊本日日新聞社、RKK、KAB、KKT、TKU、NHK熊本放送局、エフエム熊本、エフエム791

【補足】

・ 十年前、「徳永直没後50年記念事業」を開催し、数多くの県民にご参加いただきました。徳永直は2008年度の熊本県近代文化功労者賞を受賞しています。

### 「会費納入について」

・ 平成二十九年度の会費の納入を、同封の振替用紙でお願いします。なお、「徳永直没後六十年記念事業」にご賛同される方も、同封の振替用紙でお願いします。通信欄に「会費」、「記念事業会員費」の区別をお書きください。

・ 「徳永直没後六十年記念事業期成会」へのご参加をお願い申し上げます。会費は一口二〇〇〇円です。